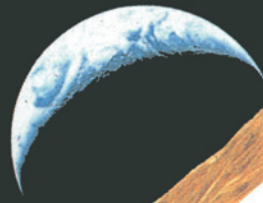


Integrated
Human
Studies



2009.3

No.44

京都大学 総合人間学部 広報

特集 ご退任を迎えられる先生方から

古くて、汚くて、なつかしい校舎	高橋 義人	2
私のトポフィリア	山田 誠	4
19年間の歴史教育を振り返って	島田 真杉	6
漂流人生もこれで定年	際本 泰士	8
退任によせて	村中 重利	10

特集 ご退任を迎えられる先生方から

古くて、汚くて、なつかしい校舎

高橋 義人（人間科学系）



いま、吉田神社に向かう参道から総合人間学部のキャンパスに入ると、4階建てのモダンな白亜の校舎が立っている。ここには、つい5年ほど前までは旧教養部A号館北棟

の薄汚れた建物が立っていた。各部屋の天井は高く、同じ高さの建物が4階建てなのに、ここだけは3階建てだった。

なかは薄暗く、いくら掃除されていても、いかにも汚そうだった。A号館の北棟は1936年に建てられた旧制第三高校の校舎、湯川秀樹も朝永振一郎もここで学び、西田幾多郎も西谷啓治も一度はここで教鞭を執っていた、由緒のある歴史的建造物だった。頭上には、三高を象徴する「自由の鐘楼」が聳えていた。ここは、私が赴任したときにはすでに片仮名のコの字型に建て増しされており、私の赴任後にはさらにロの字型になった。その中庭にバラックのような旧三高時代の木造の校舎（中央館）があった。教室の木製の戸板には数多くの隙間があり、冬はそこから入ってくる隙間風のために寒くて、私はダルマストーブのわきに立って授業をした。

古くて、汚くて、寒々とした校舎。そこで京都大学における私の教員生活が始まってから、すでに33年間の月日が流れた。今日、京都大学構内に昔の古びた建物はもうほとんど見られず、ピカピカの立派で新しい校舎が立ち並んでいる。しか

もどの教室にもテレビが備えられ、冷暖房完備になっている。20～30年前にはとても考えられなかったことだ。

校舎がまだ古くて、汚かった頃、毎年のように新入生に、京都大学の校舎をどう思うかと尋ねた。すると、もっときれいにしてほしいという当然の声に交じって、汚いほうが京大らしいという声が少なからずあった。これは意外なことだった。きれいで新しい校舎よりも、古くて汚い校舎のほうがいいとは、どういうことなのだろうか。

後述するように学生の気持ちは、古い建物が取り壊され、新しい校舎ができてみて、初めて理解できた。

古い建物が取り壊される前、旧教養部の構内を和服姿で散策している仙人の風情をした老人の姿を時々見かけることがあった。旧教養部からさほど遠くないところに住んでおられた西谷啓治先生だった。はるか昔、三高で教鞭を執っておられた先生は、建物のひとつひとつをいかにも懐かしそうに眺めておられて、声をかけるのが憚られるほどだった。

先生はおそらく古い校舎を見ながら昔日の思い出を噛みしめておられていたにちがいない。その貴重な時間を妨げてはならないと思った。

先生は1990年に90歳で亡くなられたが、もしももっと長生きされ、古い建物が取り壊されるのをご覧になられたら、さぞかし心が痛まれたことだろう。

先生ほどではないにせよ、古い校舎が取り壊されるときには、私も多少ながら心が痛んだ。多く

の人たちは、それはこの古くて汚い校舎のなかで長い年月をすごしてきた私の感傷だと言って笑うかもしれない。しかし、やはりそこには単なる個人的な感情以上のものがあつた。

旧教養部の校舎を見ながら、明らかに西谷啓治先生は、西田幾多郎先生に教えを受けていた時代のことや、自分自身が三高や京都大学で多くの学生を育てたときのことを思い出しておられたのであろう。私自身は残念ながら西田幾多郎先生にも西谷啓治先生にも直接の薫陶を受けたことはなかったが、古い校舎で授業をしていると、かつてここで京都大学の数多の著名な先生方が自分と同じようにして教鞭を執っておられたのだと感ずることが時々あつた。

つまり古くて汚い校舎のなかには西田先生や西谷先生や湯川先生がおられたときの京都大学の残香がまだ残っていて、私たちは半ば無意識的、半ば意識的にその文化的な空気を感じていた。そしてその空気を吸っている教師や学生には、自分たちも西田先生や西谷先生や湯川先生のおられた大学で学んだと言っても恥ずかしくないようにならなければならないという、暗黙の了解があつた。

古くて汚い校舎が取り壊されたということは、その空気と、その空気に含まれていた暗黙の了解が半ば失われたことを意味していたのだ。

むろん理系の研究室では設備が新しいほうがいい研究ができるに決まっていますが、文系の人間のこういう思いは理系の方々には理解しにくいかもしれない。

1月20日、総合人間学部における私の最後のゼミがあつた。ゼミが終わった後、この半年、一緒に付き合ってくれたことのお礼を学生に言うと、学生たちは、まだ何か私から最後の言葉を期待しているように見えた。そこでみなに、今の校舎は新しくてきれいだけれど、昔の建物は古くて、とても汚くてねえー、でも古いからこそここでは京都大学の長い歴史と伝統の重さを感じることがで

きたんだよ、と話した。すると一人の学生が、京都大学に来て、じつはそういう話をこそ聞きたかつたんです、校舎は新しくなったほうがいいだろうけれど、京都大学の昔の雰囲気、昔のよさをぼくたちに伝えてくれるのは、先生方しかないんじゃないですか、と言つた。

それを聞いて、学生たちに対してすまなかつた、と思つた。昔の話をすると、この老教師は感傷にふけつていられるのが落ちだろうと勝手に思いこんでいたが、じつは学生たちは、自分たちよりもはるかに年上の教師たちから、京都大学の古きよき伝統を受け継ぎたいと思つていたかもしれないのだ。

しかし伝統を受け継ぐというだけでは不十分である。西田先生や西谷先生や湯川先生たちが望んでおられたのは、自分たちを学問的に凌駕するような後継者が育つことであつたにちがいない。京都大学の長い伝統を背負いながらも、すぐれた先輩諸氏がおられた頃の京都大学に負けたくないようなすぐれた京都大学をつくること、それが、新しい校舎で教え新しい校舎で学ぶ新しい世代の人たちに与えられた課題であるにちがいない。

(たかはし よしと)



院生たちとの恒例の創立記念日ハイキング
(2007年6月18日)

私のトポフィリア

山田 誠（文化環境学系）



1988（昭和63）年に京大教養部に勤め始めて以来、このキャンパスで21年を過ごした。その間、居室はずっと吉田南2号館-D号館という旧称の方がずっとなじみがあるのだがー

4階南向きの1室で、まったく移動することがなかった。この建物はすでに築後50年近く、今日では吉田南構内の主要建物の中で最古のものとなっている。また私の研究室は南向きとはいえ、すぐ前に隣の吉田南3号館（旧称F号館）の壁があり、必ずしも見晴らしがよいわけではない。その上、数年前の耐震改修工事の際に、当時の事務長が「耐震工事から2、3年後には内部改修も行われて、見違えるようになります」と教授会で保証？してくれたにもかかわらず、実際には耐震工事だけが行われ、内装は手付かずのままで退職の年を迎えることになってしまった。

このように書くと、私はこの文章をグチで終始しようとしているのかと思われるかもしれない。しかし、私の意図はそれとは逆である。この研究室で長く過ごせたことへの感謝の気持ちをこの小文で表したいというのが、私の真意なのである。私がそうした感じを抱いているのは、ひとつには、人環棟完成に伴う関係研究室の再編以後は、隣の1室（旧教養部人文地理学教室中央室）を分野共同研究室として使わせていただくことができ、大変使い勝手がよかったという事情もあるが、理由はそれだけではない。では他にどのような理由が

あったのか。それを記すことが本稿の主な目的である。

1964（昭和39）年に京大に入学した私は、入学後まもなく学生サークルとしての地理同好会に入会した。このサークルは当時の教養部人文地理学教室の先生方（藤岡謙二郎教授、西村睦男教授、足利健亮助手）の全面的な庇護の下にあり、われわれ同好会の会員は、講義の合間などにしばしば人文地理学教室の中央室（足利先生の研究室）を訪れた。この部屋は文字どおり「中央室」であって、その部屋の両側に藤岡先生と西村先生の研究室が配置されており、中央室と両教授室との間は、ドアで直接つながっていた。ただし、私が入学後まもなくF号館の建設工事が始まり、西隣の教授室はD号館からF号館への渡り廊下につながる通路に転用された。3回生になって地理同好会の一線を引退してからも、専門書の閲覧などで教養部人文地理学教室にはしばしばお世話になった。とくに修士2年であった1969年には、文学部の研究室や図書室を使えない期間が長かったため、当時の中央室（青木伸好助手の研究室）に毎日のように出入りさせていただいた。その後文学部の助手になり、さらに他大学に転出してからは、教養部人文地理学教室を訪れる機会は減ったが、それでも年に数回程度はさまざまな用務で研究室を訪れていた。その間、1982年度（前期）と1985年度には非常勤講師として教養部に出講する機会が与えられた。

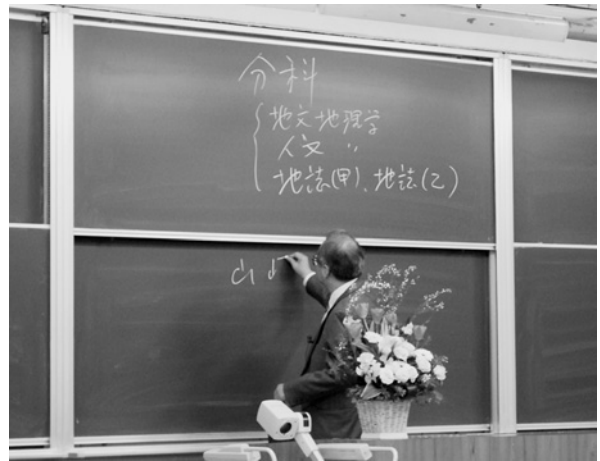
こうした折にいつも訪れていた研究室であったから、1988年に教養部での勤務を始めるようになった際も、そこに専任として勤務するのは初め

てであったにもかかわらず、何か古巣に戻ったようなアットホームな感を抱くことができた。もちろんそれには、先任の教官であった足利・青木両先生が、上記のように以前からずっとお世話になっていた方であった（それだけに、お二人がともに現職のまま世を去られたことは、私の京大在職中の最大の痛恨事である）という事情も大きい。それに加えて「場所のもつ力」あるいは「場所への愛着」というべきものも無視できないような気がするのである。「場所への愛着」というのは、私がこの小文の表題に用いたトポフィリアという英語（大きな英和辞典にも載っていない単語で、あるいは中国系アメリカ人地理学者トゥアンの造語かもしれない）の訳語であり、ここ30年ほどの人文地理学の中で、一部の研究者に大変重要視されている概念なのである。私自身はそうした概念を用いた研究をしているわけではないが、初めて訪れた職場で勤務を始めるのと、以前からしばしば訪れていた所に毎日通うようになるのでは、やはりそこに溶け込むのに要する時間は大きく異なるのであろう。

そういえば、私が大人数の講義で使うことが多かった4共21（旧称E21）講義室も、私には特別の思い出のある部屋である。1回生の折、藤岡先生の人文地理学の講義を拝聴したのは、まさに

この部屋においてであった。先日の最終講義でもこの部屋を使わせていただいたが、講義中、この部屋で最初に講義を聴いた45年前のことを思い起こし、しばし感慨にふけたことであった。

（やまだ まこと）



最終講義（2009年1月21日）

19年間の歴史教育を振り返って

島田 真杉（国際文明学系）



改組前の京都大学教養部歴史学教室に西洋史（アメリカ史）の担当者として赴任して以来、早や19年近い時間が過ぎて、私は間もなく離任の日を迎えます。この間、改組に伴

い総合人間学部と人間・環境学研究科を担当するようになって、研究・教育環境は激変しました。教育の負担が急増する一方で、同時に、新構想学部・研究科ならではの新しい感覚と関心を持った多くの学生に出会い、多様な観点から歴史を語り合えたことは、いま振り返って貴重な体験であったと思います。この機会に、これまで全学のおよび専門の歴史教育について感じたこと試みたことを、ごくごく手短かにですが、振り返って、退任のご挨拶に代えたいと思います。

それまでに勤めた2つの大学では、西洋史を専攻する学生を相手にしていましたが、本学ではまず一般教育としての西洋史やアメリカ史に、そして改組後は専門教育として地域研究としてのアメリカ研究にも携わってきました。赴任の時期は、バブル景気の風潮や冷戦終結の思想史的影響か、歴史と歴史研究に対する学生の関心が急速に変化していくように思われた時期と重なりました。講義に際しては、アメリカ史の重要なテーマについて、物語的に講義をしたり、事実を確定するプロセスあるいは解釈の変遷の紹介に重点を置いたり、試行錯誤したつもりですが、一般教育では、受講生に史料を通して歴史を追体験してもらうことに

力点を置きました。マルチメディアの時代になって、学生の周りで歴史に関わる情報とその源とが急増するとともに多様化し、歴史研究と歴史教育の比重が一挙に小さくなったように思われ、また従来のような歴史の語り手と受け手という形の講義の意義にも疑問を抱くようになったからでした。

試行錯誤のなかで手がかりの一つにしたのは、米国の中高等教育や大学での一般教育における歴史の位置づけです。それは一言でいえば、過去の事象についての知識を集積することのみならず、その知識、さらにその学習のなかで身に付けた感性や判断力を道具として活用する能力までを含めるものです。米国の若者にとっても歴史は、関心の大きさという点でいえば、じつはずっと下位にくる教科ですが、そんな若者を相手に米国の歴史学界は歴史教育にたいへん熱心で、また次のような見方を広く共有しています。すなわち、過去のさまざまな状況の中で、先人にはどのような選択肢があったのか、その中でどのような選択・決断がなぜ下されたか。学生・生徒がこうしたことを学ぶことにより、政治に参加する市民としての資質を高めることができるということです。民主主義社会、共和制社会における市民教育の核として歴史教育を利用しようとするものです。これは、日本の歴史教育とおおきく異なるところだと思われます。歴史へのこのようなアプローチは、いわば実用的歴史学習であり、恣意的な利用を招くなどの疑問や批判も出てくるとは思われますが、単純なアナロジーが目指されているわけではないでしょう。誰もが政治に参加し、重要な政治的判断を下さなければならぬのが民主主義社会だとすれば、歴

史の一こま一こまは、たしかにその経験を積むためのかけがえのない教材でしょう。

私も、このような見方を一部ですが取り入れ、19世紀末とか第1次世界大戦期とか、あるいは1930年代とか、アメリカ史の中の激動期とされる時代の多様な市民の生活と意識についての史料をもとに、危機の中での彼らの選択を受講生に追体験してもらえよう努めたつもりです。工夫の足りない点も多かったと思いますが、意図を汲んでくれた受講生との対話は楽しいものでした。彼ら彼女らが、私の足りないところを補って、歴史と歴史の方法への関心を持ち続けてくれることを祈るばかりです。

専門教育の分野では、平均して年に1人程度であったゼミ生の卒論作成にかなり緊密に関わったことが、楽しい思い出です。そのテーマは多様ですが、消費社会形成史に関するものが多くありました。ディズニーの思想史、広告文化と家庭のあり方、消費者の成長と広告の役割、戦争の記憶とハリウッド映画、公教育における決定権と宗教の関係などなど。ゼミ生には、歴史学界の動向を踏まえつつ、将来にわたって財産になるような、作品としての卒論を求めました。過重な負担かと危惧したこともありました。しかし、例外なくそれをクリアしてさまざまな分野で活躍している卒業生の元気な姿を思い浮かべながら、いま、彼らが

残してくれた手元の卒論を開いてみると、まさに感無量です。卒業生の更なる活躍を祈るとともに、総合人間学部という、この恵まれた学問的環境の中で学ぶ皆さんが、卒論で難題に挑戦し、恵まれた素質に磨きをかけて社会に飛躍して行くことを願ってやみません。

(しまだ ますぎ)



最終講義（2009年1月21日）

漂流人生もこれで定年

際本 泰士（自然科学系）



私は、今と違って極めて地味な宮崎県の片田舎から、東京オリンピックの春に東大理科1類に入学しました。受験を前提としない高校では「勝手に勉強せい」と言われながらも、授業中に内職していると突然回答を指名されるという「かわいがり」を受けながら、マルチ処理能力を培いました。

大学の教養課程では、田舎の高校レベルとは繋がらない難解な授業が小声でぼそぼそと行われ、元々は得意だったはずの数学と物理学が大嫌いになりました。そこで、化学科に進学しようとしていたところ、友人達の志望に引きずられて、付和雷同で原子力工学科に進みました。工学部で受ける授業では、物理も数学も大変易しくて、何故教養学部先生はあのように難しく工夫しているのだろうと訝ったものです。この体験が、京大での授業において反面教師として役だっています。

しかしながら、学部専門科目には横の連携も縦の積み上げも見られなかったのです。その中で、私の期待を満たしてくれそうだけれど、極端に難解な授業をする先生を一人だけ見つけました。プラズマの乱流理論と非線形物理を専門としていた世界的にも高名なその若手助教授は、しかしながら、アメリカ留学から直ぐには戻って来ないことが判り、私は物理工学の修士課程にわざわざ試験を受けて進学し、Boltzmann 方程式から出発して乱流中の粒子速度分布の時間変化を準線形理論の枠で表現する仕事で修士論文を書きました。就職するつもりでしたが、指導教官から博士課程進学を勧められ、その気になりました。しかし、今度はその先生が突然米国留学をすと言いだし、学内の別の研究室に進学することを勧め始めたのです。

それならば、ということで、細々とした理論構築に魅力を感じなくなっていた私は、当時日本の中核研だった名古屋大学プラズマ研究所の博士課程で実験屋に転向する決意をして、再び余計な入試を受けました。後日談では、実験屋としてモノになりそうでなければ、理論部門で引き取るとの思いやり選考があったそうです。33歳で仁科賞を受賞して米国留学中だった方が凱旋帰国をしたら、その指導を受けさせるとの決定がトップでなされており、それまではベテランの先生のもとで、廃棄部品から様々な実験装置を作る技術と、装置間を走り回る体力とセンスを養う体育会系の訓練を受けました。新指導教官のもとでの3年間は、装置の設計、電子回路製作、実験、データ解析及び理論モデル構築など、「料理の鉄人」の内弟子のように、そのノウハウと視点を盗み取ることに努め、前より興味のあった、乱流中での速度分布の緩和過程を実験＋理論的に検証する課題で理学博士の学位を得ました。

横浜国立大で助手として働く間に、NASA（メリーランド州）にて地球周りのプラズマ現象の解析とカリフォルニア大（UCI）にて磁力線に巻き付いたプラズマの運動の実験研究を各1年ずつ務めました。米国では短期間に成果を出さなければ、その職を失うことが普通でした。このような環境では、複数のテーマを併行させておき、数ヶ月間隔で途切れなく論文化することが生き残りの智恵です。イチローの例のごとく、内安打があって初めて長打・本塁打が出る運も巡ってくるのです。若い諸君は参考にして下さい。おかげで、それぞれから長期雇用と faculty position を提案して頂きました。しかし、幸いにも日本で職を確保していましたので、帰国しました。

その後、筑波大学の助教授に転身して、大型核融合研究計画の推進に携わることになりました。ここでは、徹夜でグループ実験をした後直ぐに、予算要求書類・仕様書の作成や、施設部との建屋

建設の交渉、文部省から直接来る指示に合わせた説明図作成などの難作業が続くなど、睡眠時間が極端に短い日々を体験しました。その無理がたたって、人間ドックで警告を受けることになりました。当時のセンター長からは「何故君だけが？」との言葉が来ました。組織のトップはよほど良い眼を持たないかぎり、限られた者に負担が集中するのは良くあること、部下には避けられないことなのです。不幸なことも覚悟しておきましょう。その対策として、昼食後に30分ほどの速歩を行うことを義務づけました。この習慣は京大に移ったあとも続いていて、私は今でもほぼ毎日吉田山を尾根伝いに歩いています。これほど素晴らしい散歩道は珍しいと思います。私には頭の整理と新しい着想を得る機会です。何よりも心の健康に宜しいのです。騙されたと思って3ヶ月ほど試してみてください。

総合人間学部と人間・環境学研究科では、それほど数多くはありませんが、卒業論文から博士論文まで、一貫して学生諸君を指導する機会を得ました。彼らの好み・得意技は一律ではなく、それぞれの能力を発揮させることが教員の役目と心得て、私はプロデューサーに徹することにしました。例えて言えば、犬科・猫科・梟科まで広がる多様な個性に合わせて、間合いを計りながら助言・苦言を与え、小刻みなステップ毎に達成度を確認し次に進む意欲を持ってもらうよう努めました。学生毎に基準も方向もまちまちですが、企画から課題達成までを経験してもらいました。限られた時間枠の中で1つのプロジェクトを完結すると、各学生は一気に成長することを実感しました。

但し、就職等に関しては、評価するのは他人です。成果は論文文化して国際的に発信し、客観的な実績とすることが、各人のキャリアアップに必須です。強い信念は重要不可欠ですが、個人の努力の中に留まります。都合の良い支援がむこうから来ることは無い、と覚悟して、自身のキャリアを積み上げることが大切です。もちろん、その努力にも拘わらず、私の体験からは、運に恵まれないことのほうが多いと思います。方向転換を余儀なくされることもあるでしょう。

「最先端」との表現をよく目にします。今最先端と言われるものが、学生諸君が第一線に立つころまでそうであり続けるかどうか疑問です。「最

先端」の寿命は10年と考えておいたほうが良いでしょう。個人のライフスパンで考えると、社会的需要・学術的人気等の変化に対応して、いかに先導性を確保するか（少なくとも生き残るか）は重要事です。ここで諸君を支える基盤として、頭が柔らかいうちに、理数系基礎科目をきちんと身につけておきましょう。文系の諸君もメディア情報の非論理な所を指摘できる程度には、理数系を修得しておくよう願います。これに対して、教養科目は一生モノです。自分の年輪に応じて、味わい方も変わります。そこが良いところです。両方に必要な語学力は、できれば記憶力の良い若いうちに修得することを薦めます。しかし、外国語会話で伝える中身の充実を忘れないように。若者から見たライフスパンの時間軸の手前に置かれた4年間の枠内で、横の広がりや深さを様々に修得できる環境を提供するのが総合人間学部の特色であろうと考えております。当学部の存続・発展の命運はここにかかっていると思います。

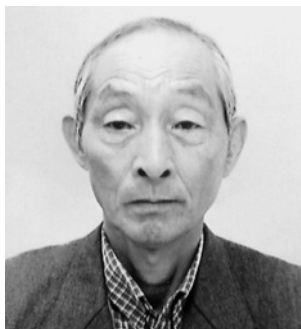
資源・気候・社会・経済等における許容限界が顕在化し、人間社会の活性を支える人の数にも制限が来そうです。この私の予測は是非間違っただけなのですが、総人の学生諸君には、その中でも指導的立場に立ち、この限界を拓ける役割を果たしていただきたいと願っております。個々人にとって、これは障害物競争でもあります。そこで、私の漂流人生における体験の一端を、敢えて俗的な面も含めて紹介しました。肯定・否定いずれでも宜しいのです。その判断が、諸君の次のステップに、わずかでも役立つことを願っています。

総人と人環での11年間は、船出の朝から嵐に遭い、漂流し続けた（と自分では感じて来た）私が、漸く入り江に辿り着き、安堵感と充実感を得る機会を与えてくれました。しかし、夕焼けを味わう間もなく、今は自船の解体・整理と港の整備計画に追われる毎日でもあります。これもまた人生でしょう。この間、暖かく相手してくださった教職員の皆様と、私に我慢強く付き合い、良く育ってくれた（元）学生諸君には深く感謝し、御礼申し上げます。

（きわもと やすひと）

退任によせて

村中 重利（自然科学系）



私がこちらの旧教養部に赴任したのは、昭和57年で、ほぼ30年前になります。その間、教養部時代のこと、大学法人化に伴う改組や、情報化技術の目覚しい

進歩のことなど、印象に残ることがいくつか思い浮かびます。そのうち特に強く印象に残っているのは、教養部時代に参加した宿泊研修旅行でした。当時、宿泊研修セミナーと言う名前で、土曜、日曜を利用した学生の一泊旅行が行われていました。この宿泊セミナーは総合人間学部時代になってからも数年続きましたが、教養部のころはもっと年間の回数も10回と多く、また対象学生も全学の1、2年生と広範囲なものでした。冬季以外、毎月、ほぼ1回程度行われ、行き先は遠いところで能登半島巡り（2泊）、ちかまでは奈良のお寺巡りや琵琶湖一周などでした。宿泊研修実行委員会がというものがあり、委員は大体、新任教官が半ば強制的に割り当てられていましたが、これが毎年、2月あるいは3月に開かれ、年間スケジュール、その他詳細を決めていました。ただ、生物、地学、歴史、人文地理などの教室の教官方は目的地に応じて参加され、大変ご尽力されておりました。私も赴任して2年目でこの役をおおせつかり、京大芦生演習林の引率が割り当てられました。割り当ては委員会で決めますが、あいにく委員会を欠席していたため、山歩きの演習林担当になり、あとで委員長に「奈良のお寺巡りなら自信があるのでそちらとの

交代を」と申し出たのですが、「お寺さんは年寄り教官がお参りに行くので、若手は山に行ってください」と言われ、やむなく引き受けました。私はそれまで、山歩きや、長時間ハイキングの経験などが殆ど無かったのですが、観念し、登山靴や、それなりの用具を調えました。

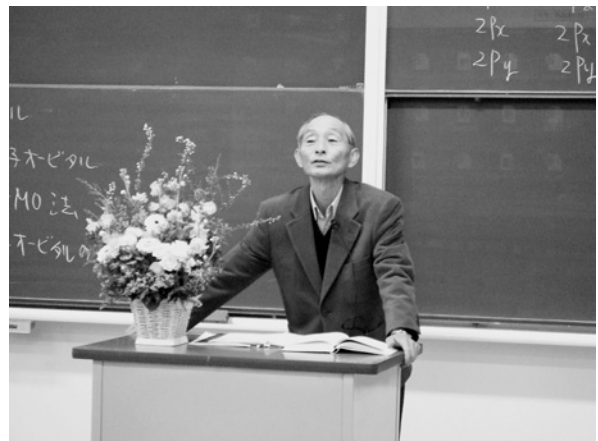
当時のメモによると、5月の連休明けの土曜日の朝9時に、総勢28名（学生25名、教官3名）で京大をバスで出発しています。鞍馬、広河原をとおり、佐々理峠で下車し、そこから、さっそく尾根づたいの道やうっそうとした森林の中を歩き、夕方頃、宿泊所の京都府青少年の家に到着しました。夕食後はミーティングとなっており、といっても雑談中心ですが、いろんな学部の学生と話し合う機会をもち、学生の考え方の一端をうかがい知ることができました。参加学生としては農学部の学生が比較的多く、私の担当している授業の学生も数人いて、「授業内容が難しい、授業のペースが速い」などの指摘を受けました。貴重な助言をもらい、以後はそれを参考にし、それなりの授業を進めるよう努めました。

翌日は二グループに分かれ、山歩きです。私たちは総勢8名で、由良川源流沿いのトロッコ道を奥の方へとたどるコースをとりました。かつては、伐採林の搬送などにトロッコが使われていたそうですが、廃線となりレールも赤錆、枕木もいたるところ朽ちておりました。レールと枕木の道は、結構歩きにくく、ことに新品の登山靴だったため、前日の山歩きですでに靴擦れができていたため、難儀しました。それでも、天気にもぐまれていたため、溪流沿いの景観や、遠くに見える山々の景

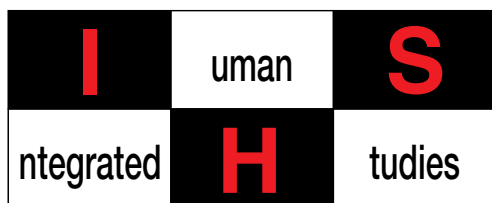
観はさすがらしく、気分が引き立てられ、また、原生林ならではの栃、ブナの巨木や、貴重な植物などに興味がそそられました。三時間程歩いた後、川原におり、開けた場所で休憩となり昼食をとりました。その後、しばらくあたりを散策し、もってきたトロッコ道を折り返し帰路となりました。参加者の中に4回生で、毎年常連になっているものもあり、ガイド役をかってでたり、不慣れな学生になにかとアドバイスをしてくれ、大いに助かったことを記憶しています。

このような宿泊研修旅行は、その後の学生からのアンケートによれば、‘学生同士や、教官との本音を出した会話によって、大いに啓発され、人生観が変わった’ また、‘森林の実地観察などによって、自然と人間の関わりあい大いに興味を持った’などと、学生に少なからぬ影響を与えているようです。そういう私にとっても、とかく運動不足になりがちなか中、全く違った環境に身をおき、自然と触れる機会をもてたのは、貴重な経験でした。機会があればまた訪れてみたいと思いつつ、生来のものぐさで今日に至っております。結局、山歩きの経験は後にも先にもこの一度限りとなり、それがためより強い印象となって残っているものと思われます。

(むらなか しげとし)



最終講義 (2009 年 1 月 15 日)



編集後記

今号は、2009年3月にご退任を迎えられる5名の先生に、原稿をお寄せいただきました。先生方が教育や研究にと、吉田南キャンパスで過ごされた、豊かで充実した時間と雰囲気を知ることができました。先生方の本学部でのご貢献に改めて感謝の言葉を述べさせていただくとともに、今後の御健勝とご活躍を祈念いたします。また、先生方はそれぞれに旧制三高以来の自由豁达な気風の大切さを指摘して下さいました。先生方が先人から継承し、そして発展させてこられたバトンを、しっかりと受け取り、旧くて新しい、知的好奇心旺盛な総合人間学部でありたいと思っています。

(A・M)

人間・環境学研究科
総合人間学部

広報委員会